

和歌山の花と海

劉 泓博
教育学部・交換留学生 中国



花

四月で桜を見たのは生まれてから初めてだった。

厳寒の地に生まれた私には、春という概念があまりなかった。故郷では、春は冬と夏の変わり目に過ぎず、道端の花は咲いたり散ったり、毎年慣例の光景だけだ。過去には鉢植えを育てたり、ローズマリーや竹など花の咲かない品種を植えたこともあった。なぜ花を育てないのかと聞かれると、いつも舌打ちして、「面倒だから」という言い訳をした。

しかし実は、私は花の美しさが大好きが、枯れてしまうことを心の底から恐れているのだ。

花が咲いては散り、私だけが残されるのは長く寂しい時間だ。

日本に来る前、周りの人たちは四月は桜の季節だと言っていたが、和歌山城に行き、あの日曜日の快晴に桜の海に溺れるまでは、それほど気にしていなかった。

実際、桜そのものにそんなに驚かなかった。故郷の桜と桃の花は色がよく似ていて、同じ淡いピンク色なのだが、あんな不思議な量の桜の海を見ると、頭の中が真っ白になって、これまでの恐怖が全部すっと消えた。

桜を見た瞬間、まるで桜と対話したかのように、消え入りそうな美しい女性が目の前に現れ、桜の美しさと日本人の心の中にある桜の哲学を語ってくれた。



海

海のそばで暮らすことは私の夢だ。

2009年に大連で初めて海を見てから、その夢はずっと変わっていなかった。潮汐を繰り返しながらどこまでも続く海は、世界のすべてを包み込んでくれるようで、悲しみもすべて飲み込んでくれるに違いないと思っていた。

海を見るために、たとえ一人でも大連に何度も行っ、夜中でも波の音を聞きたかった。

大連の海はそれほど青くも澄んでいるわけでもないが、私の中ではその海も「海」の定義になっていた。

和歌山は臨海都市ではあるが、海の近くに住んでいるわけではないので、海を見ようと思えば和歌浦まで行かなければならないし、バス代も高い。しかし、海を見るのが大好きな私にとって、行かない理由はない。

潮風が髪をなで、海を見て思わずサングラスを外した。青い海水に目を奪われたとき、なんとなく思い出したのは『炉心融解』という曲のあの歌詞、「真っ青な光包まれて綺麗」だった。

海の中で足元を見つめていると、自分も悩みも本当に消えてしまったかのように、心の中のすべてを手放した。



友人が私を現実に引き戻すまで、そうやって海に浸かっていた。そうして私は自分の体を連れて、潮の真ん中にすべての悩みを置き去りにして帰り道についた。

あと書き

実際、花であれ海であれ、和歌山はいつも私に何度も心の洗濯をする旅をもたらしてくれた。しかし、地元の人からは「和歌山はただの田舎で、遊ぶならやはり大阪の方が面白い」という声をよく聞いている。もちろん、大阪には何度か行ったことがあるが、見慣れた高層ビルはかつての苦い都会生活を思い出させた。

しかし、騒々しい大都会よりも、こちらの方が得るものが多い気がしている。大都会の冷たい喧騒とは違い、ここはあらゆる束縛から解き放たれ、心が解放されるような落ち着きがあり、温かみを感じるのだ。

和歌山的花与海

刘泓博

教育学部·交换留学生 中国

花

四月份是我人生中第一次看到樱花。

出生在苦寒之地的我对春天没有什么概念。在故乡，春天只是寒冬和酷暑之间的一个过渡罢了，路边的花开花落，不过只是走个一年一度的过场。过去也养过盆栽，种过迷迭香文竹之类不开花的品种。别人问起怎么不养花时常常语塞，总以麻烦为由糊弄过去。可事实上爱着花之美的自己，深层意识里对花的凋零怀着恐惧。

花开花落，只剩我孤身一人的时间里，何其漫长，何其寂寞。

来日本之前，周围的人都说四月正是赏樱的好时节，可当时的自己并没那么在意过，直到去和歌山城游玩，被溺死在花海之中的那个明媚周日。

其实樱花和故乡的桃花颜色很像，也是淡粉色，所以第一眼看到时并没那么惊讶。但樱花簇拥成的难以置信的花海，还是让我的心灵都释然了。

就像是和樱花交谈过一样，在看见她们的一瞬间，一位即将凋零的美女子仿佛出现在我面前，将樱花之美，和日本人脑中所思考的，樱花绽开的哲学，向我娓娓道来。

假如自己是花，既然盛大地开放过了，到一切结束的时候，看着自己的花瓣慢慢飘零，回想起自己曾经的烂漫，怎能不心满意足呢。

所以尽情绽放吧，即使一次又一次的消逝，但在下一个春天，我们仍然会以互相所熟悉的姿态重逢。

海

其实住在海边是我的梦想。

在 2009 年第一次去大连看到海之后，这个梦就一直没有再改变过。一望无际的大海，涨潮落仿佛能包容世间万物一样，一定也能把我所有的哀伤都吞噬掉吧。于是我不断地去大连旅行，不论是自己、还是和家人和朋友，都只想见上大海一面。即使是三更半夜，也想听听浪的声音。

可大连的海，好像没那么蓝，也没那么清，但那片海，还是成为了我心目中的海的定义。

和歌山虽是沿海城市，但住处不在海边，想看的话还得特地跑去和歌浦，而且来回的公交车费也价格不菲。但对于最喜欢看海的我来说，怎么可能有不去的理由。

海风拂过我的头发，看到湛蓝的海水，我不禁将墨镜摘下。将目光遗失在蓝色海水的时候，不知为何会回想起《炉心融解》里面的镜音铃尖叫着唱出的“真っ青な光包まれてきれい。”

盯着海水里自己的脚，放空脑海中的一切，仿佛自己和烦恼真的消失了一样。

就那样一直沉浸在海的怀抱里，直到同行的友人将我拉回现实。于是我找回了自己的身体，踏上归途，将所有的不愉快都遗落在潮水当中。

后记

其实不论是花还是海，和歌山总是能给我带来一次次洗涤心灵的旅程。可是经常听本地人说，和歌山就只是个农村而已，如果出去玩的话，还是大阪比较有趣。当然大阪也去过几次，可是那些熟悉的高楼大厦又让我想起我那苦涩的都市生活。

但我觉得在这个地方收获到的远比在那些喧闹大城市多。不同于大城市里的冰冷的喧闹，摆脱了所有束缚，心灵获得了自由的我，能感受到这里的平静是有温度的。